

古代日本語の混成性：アルタイ系言語とオーストロネシア系言語との混成

板橋，義三
九州大学留学生センター

<https://doi.org/10.15017/6796403>

出版情報：言語科学. 37, pp.11-33, 2002-03-04. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



「古代日本語の混成性—アルタイ系言語とオーストロネシア系言語との混成—」

板橋義三（日本語）

0. はじめに

日本語の系統論が体系的な比較言語学的研究として本格的に日本国内で始まったのは1960年代の後半であるが（国外においても同様）、1970年代にはいり、その成果が徐々に著されてきた。そして、その70年代は村山七郎がはじめてポリワノフの日本語混合説を日本に紹介するとともに、その日本語混合説の路線を発展された。それから約30年近くが経過し、日本語の起源、特にアルタイ諸語とオーストロネシア諸語の比較研究に対してはわずかずつ着実に進展があった。即ち、日本語とアルタイ諸語、日本語とオーストロネシア諸語との類型論的比較はだいぶ減り、比較言語学の原理に基づいて音韻や語彙ばかりでなく、形態・統語のレベルでの比較が行われるようになったことである。このような中で日本語を「起源」として（分岐型）ではなく「形成」としてひとつの語族に帰属させない（収束型）混成説が国内でさらに発展した。そのことにより、日本語の系統論に異なった視点を取り入れられ、従来の方法論の未熟さが露呈するとともに、起源論・形成論という異なった考え方が顕在化した第二段階に入った。さらに今世紀にはいり、国内外でもしだに日本語の混成性が理論的、実証的に受け入れられ始めている。

日本語の系統を論じる場合、現段階では上述のように基本的に2つの異なる立場がある。一つには一つの語族に帰属させる起源論（分岐型）ともう一つは二つまたは二つ以上の語族に帰属させる形成論（収束型）である。現在私自身としては後者の立場を取り、特に二つの異なる主な起源を持つとする混成語論である。さらにアルタイ諸言語間の親縁関係に関しては様々な問題はあるものの、同系関係の可能性は高いと筆者は見ている。オーストロネシア語族に関しては従来のオーストロネシア比較言語学の立場を踏襲し、語族内での同系関係は存在していると考えている。それを作業仮説として概略的には複数のアルタイ系、特にツングース系言語、韓系言語とオーストロネシア系言語の混成説を主張している。以下の順序で述べる。

（1）まず筆者の考え方の基盤となっている混成言語について、これまで認知されている自然言語を取り上げながら概観する。

（2）言語の起源の解決策として下記の比較言語学における三原則に則り古代日本語を概観する。

三原則は必須であるが、日本語のような遠隔言語の場合、方法論として特にそのみに留まらず、単語家族やプロソディーにおける規則的な対応関係は勿論のこと、言語接触と言語孤立における言語変化類型と言語変化速度の関係、意味変化類型、共時態・通時態の音韻変化規則、借用(特に基礎語彙における)の不可能性、さらには第二言語習得理論やバイ

リンガリズム、そしてピジン・クレオールの形成過程などが分かってくれば、より確実な親縁関係を築くことができると考える。拙論で使用される省略形は以下の通りである：

日本祖語(PJ), 朝鮮祖語(PK), ツングース祖語(PMT), モンゴル祖語(PM), チュルク祖語(PT), アルタイ祖語(PA); 台湾祖語(Pfor), 西部マラヨ・ポリネシア祖語(PWMP(>インドネシア祖語(PInd):フィリピン祖語(PPil)), 中央・東部マラヨ・ポリネシア祖語(PCEMP), オーストロネシア祖語(Paus)

1. 世界の混成言語と日本語

混成言語を簡単に定義しておく、「**基礎語彙の大部分を一つの基幹言語が保持し、文法(形態と統語)の大部分を他の言語にその起源を有する言語**」をいう。これまでに公表された混成言語の数は30以上に上り、1999年のオーフス大学の混成言語ワークショップで発表された混成言語の数だけでも10に近い。これまでに公表されてきた典型的な混成言語は以下の通りである。

- 1) ミチフ語：クリー語文法／フランス語語彙
- 2) 銅島アリュート語：ロシア語動詞活用体系、代名詞／アリュート語文法と語彙
- 3) マー語：バントウ語族文法／クシ語族基礎語彙、バントウ語族語彙
- 4) アングロ・ロマーニ語：英語文法／ロマーニ語語彙
- 5) メデイア・レンガ語：ケチュア語文法／スペイン語語彙
- 6) ジャヴィンド語：ジャワ語文法／オランダ語語彙
- 7) カラワヤ語：ケチュワ語文法／プキーナ語語彙

混成言語の形成において重要なことは、その借用語彙率や基礎語彙の保持率は言語によって異なるが、**基礎語彙が本来の言語から継承し文法を他の言語から多量に借用して形成されている**という点である。即ち、この継承基礎語彙と多量借用文法から構成されている言語が混成言語の一般的な定義である。従って、これまでの混成言語形成過程から、「**基礎語彙を多量に有している言語が基幹言語となり、その後その言語が他言語の文法を多量に取り込み文法が入れ替わるという通時的な変化順序**」を「**混成言語における一般的変遷順序規則**」として考えることができる。

この原理を日本語に当てはめると、日本語が主にアルタイ系言語とオーストロネシア系言語との接触によって生じたと考えると、オーストロネシア系言語が基幹言語としてあり、その後アルタイ系言語の文法が多量に借用されたことにより日本祖語が形成されたと考えることができる。それは以下で見ると古代日本語の基礎語彙の保持率（オーストロネシア諸語との同源率の高さ）と文法形式（アルタイ諸語との同源率の高さ）からそのように結論付けることができる。

2. 同系を示すための比較言語学上の三原則

同系を示すためには次の比較言語学上の三原則が同時に満たされることが必要である。この原則は印欧比較言語学の知見から形成された経験的原則であるが、特に日本語のように遠隔関係 (distant relationship) と考えられる言語との同系性を問題にする場合、その原則それ自体を最低どの程度まで満たせば、同系と言えるのかという点に関しては統一された決定的見解はまだない。従って遠隔語族/言語間の親縁性をより確実にする方法は音韻、形態、文法、語彙・意味のレベルで量、質ともに三原則を満たすことだけでなく上記の方法論上の観点も考慮することであるが、拙論では紙面の関係上この三原則のみに終始する。この原則は日本語とアルタイ諸語、そして日本語とオーストロネシア諸語との間に、問題となる言語学の領域（大きく分けると「文法」と「基礎語彙」に二分される）において量、質ともに満たされなければならないことを意味している。これは後に述べるが、これまでに知られている混成言語の対応関係がそれぞれ問題となる領域において満たされていることがわかったためである。

a. 基礎語彙の形態と意味が一致または類似・相似であること

b. 規則的な音韻対応を示すこと

c. 文法項目と形態素に一致が見られること

上記の三原則をそれぞれ順に見ていくことにする。

a. 基礎語彙の形態と意味が一致または類似・相似であること

基礎語彙は (100 項目) 印欧諸語間でもすべて一致することはなくだいたい借用などが見られ、遠隔語族間では一致しない語彙が多くある。しかしながら、**基礎語彙はある程度借用可能ではあるが、混成語を含めた世界のどの言語でも多量 (例えば、50%の基礎語彙借用) に借用されることはない。この点は経験的な大原則である。**

基礎語彙を以下のように意味・形態を基に分類した。一項目において少なくとも3語族・言語間で同源と見られる語のみを挙げることにする。また [] 内の語はアルタイ諸語にもオーストロネシア諸語にも同源ではないと見られる語または同源語が見つからない語と二言語間のみで同源と見られる語彙を示す。

まずその前に日本祖語における母音について見ると、日本祖語の母音は4母音/iaou/と考える。従来古代日本語の母音に関しては8母音 (大野説), 6母音 (服部説), 5母音 (松本説) の3つの説があるが、日本祖語に関しては、現在では4母音説にまとまっているようであり、4母音説はここでは深入りしない。その他の説は日本語内において体系的にまた論理的にその母音の変遷を示すことが出来ないだけでなく、アルタイ諸語または祖語 (特にツングース祖語)、またオーストロネシア諸語または祖語との共通の語彙や形態素をもつということを体系的に説明するすべを全く失ってしまいかねない。

Vovin(2001)は国際共同研究会発表において 7 母音説を提唱している。それはオーストロネシア祖語の時期は5千年から6千年前であり、日本祖語が始まる弥生時代(300BC)の始まる時期とはだいぶ時期的に異なるため、日本祖語の形成に貢献したオーストロネシア系言語はオーストロネシア祖語ではなくその子孫の言語(例えば台湾祖語など)であるとした。しかしながら、到来時期と日本祖語形成時期とを別に考えれば問題はなく、到来時期が5千年前でもそのあと日本列島内で変化していったと考え、オーストロネシア祖語の直系と考えてもかまわないことになり、何もその分岐した子孫の言語(台湾祖語など)を考える必要は必ずしもないと考える。

次に基礎語彙の各項目を順に見ていく。

1. 代名詞(全部で8項目の語がある;以下数のみを記す)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
我	*na	*na	--	*na-	--	--
我々	*ba「我/我々」	--	*bua	*ba/ *bi-ta	*biz	*ba
汝 ₁	*na	*na「我」	--	*na-「我」	--	--
汝 ₂	*si	--	*si	--	*si	--

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
我	*a	*ak	--	*a	*aku
汝	*na	--	--	*na	*na(3p.sg:短形)
汝(ら)	*i	--	--	*i-a(3p.pl:PCP)	*ia(3p.sg)
彼/それ(ら)	*si	--	--	*si	*si
何	*n-ani	*anu	*anu(PInd)	--	--

[誰 PJ*ta-, これ PJ*ko-, それ PJ*so -, あれ PJ*ka-/a-] 同源と考えられる語なし

代名詞は基礎語彙の中では印欧語においてさえも真の音韻対応の一致が少なく問題となってきた(橋本 1978: 40-42)ことも念頭において論を進める。

古代日本語には一人称代名詞には a, na, wa の他に nare, ware などがあり, na は主に二人称に使われたが, 一人称にもまれに使われた. このほかに二人称には i と si が使われたが, si は主に3人称代名詞と指示代名詞として使われ, あたかも i と si がちょうど人称上では対になっているようで, 互いに何らかの関係があったと見られている. それに対し, na と wa も一人称代名詞の中でも使用領域が特定されていた感があり, ここで示しているように, wa は対になっているもの(夫婦)や抽象的なもの指すことが多い(notional plural)のに対し, na は単数(notional singular)のものを指している. これはアルタイ諸言語の ba と na にちょうど対応して同源語である蓋然性があるが, 朝鮮語からの借用の可能性もある. ま

た、汝₂ *si はアルタイ諸語との関連はツングース祖語やチュルク祖語ではほとんどが代名詞用法であり、日本語の多角的用法とは異なるので、その信憑性も低くなり、反対にオーストロネシア諸語との関連ではその用法が多彩で対応するものがほとんどであることから（板橋 2000,2001）オーストロネシア系言語との親縁関係が深いことが窺える。

また人称代名詞においてオーストロネシア諸語との比較では日本語と比較される語が人称ごとに存在し、これらのほとんどが本来指示詞であり、その点からも同源語として有力であると考ええる。ただし従来いわれてきたように、人称代名詞は借用される可能性も大いにあるため、その点も注意しておく必要がある。

2. 数に関するもの（4項目）

アルタイ諸語： 同源と考えられる語なし

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
多い	*opo-	--	*ə(m)pu 「祖先、孫」	--	*ə(m)pu 「祖先、孫」
一	*pito/pita	--	--	--	*p-iCa-n「一体性、共に」
二	*puta/pata	--	--	--	*patag 「一対」
みな	*mina 「全空」	--	*bua' 「果実」	--	*bu'ah 「果実」

[多い PJ*mane- PK *man-h-]

この数に関する基礎語彙はアルタイ諸語との関連では4つだけであるが、そのうちのどれも同源である可能性がなく、上記の「多い」だけが朝鮮語と関係がある可能性がある。数字に関する基礎語彙は借用される例もだいぶあり、今日では基礎語彙の中でも中心的なものではない。が、もし1から10の数字の中で少なくとも半分が同源であると確認されれば、それはその言語が同起源であることを暗示している。（ただし、現代日本語のように2つの異なる数のセット（中国数と和数）がある場合は別である）。アルタイ諸言語とは数字4, 7, 8, 9などが同起源であると考えられる。

オーストロネシア諸語との関係ではこの項目のすべてがこの語族に同源語を見出しているが、この他には数字5が最も信憑性が高いものと考えられる。その他の数字3, 6, 10に関しては現時点ではその同源語は不明と考えられる。また PJ *mina「全空」はオーストロ・アジア諸言語では「全語」と同様の意味があることも参考にすると（峰岸 2001 perosonal communication), ここで示している PWMP *bua' 「果実」や Paus *bu'ah 「果実」も十分比較可能である。

3. 形容詞（10項目）

アルタイ諸語： 同源と考えられる語なし

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
大きい	*opo-	--	*Ɂ(m)pu 「祖先、孫」	*Ɂ(m)pu 「祖先、孫」	*Ɂ(m)pu 「祖先、孫」
小さい	*tipisa-	--	*laNpis 「薄い」	*(ma)nipi(s)	*tipit'>tipis 「薄い、小さな」

[新しい: PJ*sara(更); PK *sai, 満ちた: PJ *mit-; PK *mūt- 「及ぶ」 (>MK mit-), 暑い/暖かい: PJ*atu-/*ata-taka-; PK *CVtakap/*CVtatut]

[長い PJ*na^aka-, 寒い PJ*sa^mpu-, 良い/善い PJ*yo-, 丸い PJ*maru-/*maro-, 乾いた PJ*pi]

同源と考えられる語なし

形容詞という品詞の範疇でもアルタイ諸語と同源と考えられる語はないようであるが、朝鮮語と比較できる、または同源と考えられる語が多少ある。特に重要と見られるのは「新しい」という語の対応である。これは後に述べるウイットマンの法則の例としてあげられるものであり、これまで指摘されてこなかった例である。

オーストロネシア諸語との関連でも形容詞に関しては同源語がほとんど見出されない。このことはどのような意味を暗示しているのであろうか。同源語が見出されない語は他の語族などから借用したものである蓋然性も多分にあるであろう。

4. 人間 (3 項目)

アルタイ諸語：同源と考えられる語なし

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
女	*wo-mina	--	*bai	*pine	*binai
男	*uCa	--	*uRan	--	*uRaŋ 「血族の若者」
人	*pi-taCu	*tau	*tau	*tau	*tau

基礎語彙の中でもこれらの中心的な語であるにもかかわらず、アルタイ諸語と同源と考えられる語がみつからないのは非常に奇異に思われるが、その理由と考えられる一つにアルタイ祖語が日本語にいつどのように関係したかということがあると思われる；即ち日本語の混成性において、アルタイ(ツングース)祖語が多量文法借用という形で関係したと考えられることである。それを裏打ちするかのように上記のごとくオーストロネシア諸語との同源語が見出されるからである。つまり、アルタイ(ツングース)祖語はいくつかの波が日本列島に押し寄せたに違いないが、それが主に多量文法借用という形で先住のオーストロネシア祖語が基礎語彙を網羅していたと考えられるのである。

5. 身体に関するもの (21 項目)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
皮膚	*kapa	--	--	*kaɣ u-da-sun 「樹皮」	*kapuk 「樹皮」	*kap-
臭ぐ(鼻)	*kag- *koh 「鼻」	*xo ɣ o- 「鼻」	*ka ɣ -bar 「鼻」	*ka ɣ V 「鼻」	*ka ɣ - 「鼻」	

足 *pagi *pal *palga-n 「足, 脚」 *pala-gan 「掌」 -- *pal- 「足, 脚」
 毛 *ka-Ci *kilka *xinga *jilga-sun *kil *kil
 心 *kokoro *kokoyV(>MK kokoyang) 「核」 *xuku-n *kōkūn 「胸」 *gōkūz 「胸」 *kōkōr₂

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
鼻	*pana	--	*paŋa 「あご骨」	*(m)paŋa 「分枝」	*paŋa 「分岐」

(Wurm, Wilson 1975:85)

目	*ma-Ci/*ma-na-	*mata	*mata	*mata	*mata
歯₁	*paCa	*pagan 「臼歯」	*baRahan 「臼歯」	*baRaŋ 「臼歯」	*baŋaŋ 「臼歯」
歯₂/牙	*ki	--	*gigi	--	*gigi'
歯₃	*ni(cf. nikamu)	*ipun	*Nipen	*nipon/*lipon	*nipen
舌	*sita	*lida	*dila	*dilah	*dilah
手	*ta-Ci/*ta-na-	--	*taŋan	--	*taŋan
耳	*mimi	--	*bibiR 「唇、縁」	*(m)pi(m)piR 「唇」	*(m)bibiR 「唇」
胸	*titi 「乳房」	*tsutsu	*DebDeb	*susu	*susu
肉	*sisi	*sitsi 「肉」	--	--	*it'i/*isi 「内容」
腹	*para	--	*dapan 「掌」	*pala(s) 「掌」	*palag'/*tapak 「掌」
爪	*tumaCi-	--	*puDut 「指先でとる」	--	*zumput 「指先でとること」

[歯 PJ*ni; PK*ni; PAin*ni 腹 PJ*para PK*pai(>MK poy), 摘む/爪/つまむ: PJ*tum-/*tuma-; PK*cup- 「摘む」 PK*top-(>MK t'op) 「爪」]

[血 PJ*tuCi, 骨 PJ*poniCa, 頭 PJ*tu^mbu-ri, 口 PJ*kutuCi, 膝 PJ*piza, 首 PJ*ku^mbi, 肝 PJ*kimo]
 同源と思われる語なし

身体語彙に関してはあまりアルタイ諸言語と共通のものが見出されない(25%)が、これは必ずしもアルタイ諸言語との親縁性がないということを暗示しているわけではなく、上述したように多量の基礎語彙借用(例えば、約半分の50語程度の借用)はこれまでどの言語でも発見されていないので、これらの基礎語彙がいわゆる単純な借用という以外の形で日本語の層として存在していることを示しているように見える。

それに対して、この語彙項目ではオーストロネシア諸語とは同源率が約半分(50%)であり、その語彙が本来借用されたものであるとは到底考えられず、本来の語族に属しているものとは考えられない。

6. 動作に関するもの(19項目)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
食べる	*jip-(>yip>ipi)	--	*jəp-	*jə-	*jə-	*jəp-

かむ *kam- -- -- *kebi-「かむ」 *kāb-「かむ」 *keb-「かむ」
 聞く *kik- *kuy(>MK kuy)「耳」 -- *kul-ku「中耳」 *kul-kak「聞く」 k'u₁k-「耳」
 知る *sir- *sey-「数える」 *sal- *sana- *san-「数える」 *sa-
 泳ぐ *oyo-k- *hoyo(>MK həyə-) *eye-「流れを下る」 -- -- --
 横になる *nu(寝) *nup-「臥」 -- *nobīr「寝ること」 -- --
 腰掛ける *bi- -- *bi-「ある」 *bū-「ある」 -- *bū-
 焼く *yak-/*dak- *da(>MK t'ə-) *dūr- *dōr- -- *dōr-
 死ぬ: *tuk-(尽きる) PK *tūk(>MK ti->NK čuk-)「死ぬ」 PMT *tuku-「死ぬ」 -- -- --

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
食べる	*kaCi「食物」 --		*kan/*kai「食べる」	*kani「食べる」	*ka(n)「食べる」
飲む	*nom-	*inom	*num「飲む」	*inu(m)	*inum「飲むこと」
かむ	*kam-	--	*kaRaC	*kaRati	*kagat「かむこと」
横になる	*nu-	--	--	*eno	*'inap「寝る、眠る」
眠る	*i-nu-	--	--	*eno	*'inap「寝る、眠る」
死ぬ	*pataCi-	--	--	*paCey/*maCey	*patay/*matay
立つ	*tat-「現れる」 --		*dadi「成る」	--	*zadi'「成る」

[来る: PJ*ko- PMT*gel-, 言う: PJ*yip- PK *ip「口」, 焼く 2: PJ *kub- PK *kup-,]

[見る PJ*mi-, 殺す PJ*koros-, 与える PJ*atap-, 歩く PJ*aruk-,] 同源と考えられる語なし

動詞は他の範疇と比べてアルタイ諸語と共通すると考えられるものが多いのが特徴である。これは形容詞と比較するとその対照が浮き彫りにされる。これは動詞という語彙範疇の特徴、即ち、形態・統語上の関連が最も強い範疇であるので、混成言語説では語彙の中でも文法範疇に直接関連するものであるから、基層または混成語の語彙を基盤とする言語がアルタイ系言語ではないことを暗示しているように思われる。

7. 自然界に関するもの (14 項目)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
水	*mi-	*mul	*mu-	*mor	--	*mor
石	*diso	*dul ^Λ g(>MK tolh)	*jolo	*tilagun	*taš [✓]	*dol [✓] y
地	*na「土」 *na(>MK nara「国」)		*na「土」	--	--	--
山	*dama	--	*daba	*daba-「登る、越える」	--	*daba-「登る、越える」
砂	*yisa- ^m ko	*dulag(>MK tolh)	*jolo	*tilagun	*taš [✓]	*dol [✓] y

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
----	----	------	------------------	-------	------

水 ₁	*nan	*ndanum	*lanu		*ndanu(m)	*danum
水 ₂	*wi「cf.井戸」	--	*wai		*wai(R)	*way v
石	*yi-pato<ipapo	*patu	*batu		*batu	*batu
山	*takaCi/tsaka	--	*sakay「乗りあげること」		*nsakay	*s)akay「上昇」
太陽	*sina「しな照る:枕詞」		*tsilar「光」		*siNaR「光線」	*sulu「光」
火	*poCi	*hapuy	*x ₁ apuy		*api	*xapuy
煙 ₁	*aso「阿蘇」	--	*qasuk		*qasu/*qaso	*(q)asu(h)
星	*posi	--	*bintan		*pituqu	*bi(n)tuhən
雲	*kumuCa	--	*Rambun		--	*Ra(m)bun
夜 ₁	*pono「夜あけ」	--	*b ni「夜」		*poni「夜」	*ban(i)「夜」
夜 ₂	*yopi「宵」	--	*Rabi「夜」		*Rapi「夕」	*Rabi「夕、夜」

[星: PJ *posi PK *piol (>MK pyel), 雲: PJ *kumuCa PK *kumum, 夜: PJ *do PMT *dolba]

[月 PJ*tukuCi, 川 PJ*kapa, 煙 2PJ*kaCi^mpuri, 灰 PJ*papi]同源と考えられる語なし

このカテゴリーでも上記の形容詞のカテゴリーと同様にアルタイ諸語と共通と考えられる語が極端に少ない。この中でも「水」を表す古代日本語には2つ全く系統の異なる形態素 mizu/mi-と na-（複合語「なづきだ/na-duki-ta/」「水に浸かった田」などの形で存在）が存在しており、一般には後者はあまり知られていない。後者はアルタイ諸言語と共通するものではなく、上記のようにオーストロネシア語族との比較が考えられる。

オーストロネシア諸語とでは約半分の語が同源語と見られるが、特に特徴的なのは形態を異にする同義語がいくつかあり、その同源語がこの語族の中に見つかることであり、日本祖語におけるその同源性の高さが示されているように思う。つまり、これはオーストロネシア祖語それ自体が一度に日本列島に到来したのではなく、何度も異なるオーストロネシア系の人々が到来し、そのいくつかが定着し、全体的に使用されるに至ったことを意味している。

8. 生物及びその関係するもの (9 項目)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
鳥	*tori	*tolk「鶏」	*turaakii「鳥」	*tura-γ u-n「渡り鳥」	*tor ₁ iga「小鳥, ひばり」	*tor ₁ V-

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
魚	*iwo	--	--	--	*iwak
羽	*pane	*pane「翼」	--	*pan(i)「翼」	*panig'「翼」
角	*tuno	*tsunu	*taNduk/*sunay	--	*sunu
尾	*wo<*uCa	--	*ua「腱、血管」	--	*uRat「腱、血管」

犬₁ *woso *watsu *asu -- *wasu

[犬₁ PJ*woso; PAin*wose; 犬₂: PJ *inu PMT *ɲinda, 虱 PJ*sirami, 脂肪 PJ*a^mpu-ra 「火であぶること」, 卵 PJ*tama-ko: PChin. *tam] 同源と思われる語なし

この意味範疇では動物などの身体部分や関連語彙にはあまり共通した語が見出されない。が、「犬」にあたる日本語がツングース諸言語と軌を一にしているが、これも上記の「水」と同様、系統の異なると考えられる語が2つ存在していたと考えられる(村山1996)。それは*inu と*woso であり、後者は「かわうそ」の「うそ」という複合語の一部として残っている。これはさらにアイヌ祖語 *wose と同源であると考えられる。これらはすべて上記のようにオーストロネシア系の言語と同源であると考えられるが、それと共に他の多くの語を基盤に持っていたものと考えられる。

9. 植物 (5 項目)

アルタイ諸語

意味	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
樹皮	*kapa	--	--	*ka γ u-da-sun 「樹皮」	*kapuk 「樹皮」	*kap-

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
木	*koCi	*kahiu	*kayu	*kayu	*kahiu
葉	*paCa	*fafaR	*papah 「葉柄」	--	*papaR 「葉柄」
種	*tanaCi	*tanum	*tanum	*tanum	*tanam 「植える」

「植えること、埋めること」こと、埋めること」

[根 PJ*naCi] 同源と考えられる語なし

植物の部分を表す基礎語彙はほとんどアルタイ諸言語にその起源を求めるのは難しく古代日本語には多くの一音節語がこの範疇にはいる。この特殊な状況は日本語の形成史にとってどのような意味を表しているのか深く追求する必要がある。

上述のようにオーストロネシア諸語は基本音節構造は2音節であるから、日本祖語における語も古代日本語の音節構造から2音節であったと考えられ、それが母音の融合により、一音節化したものと見られる。この語彙範疇でも同源率が50%以上である。

10. 色彩 (5 項目)

アルタイ諸語: 同源と考えられる語なし

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
緑	*mi ⁿ daCuri	--	*hidau	--	*hidau
白 ₁	*puti	--	*putih	*puti	*putih
白 ₂	*siro	*tsilar 「太陽」	*siNaR 「光」	*sulu 「光」	*silaR 「光」

黒	*kuro	--	*del'em	--	*gəlap「暗闇、夜」
赤	*aka	--	*sakay	--	*sakay「上昇」
黄	*kuCi	--	komat kuunig(Kal)	--	*kuniN

色彩に関してはアルタイ諸語との共通語彙を全く見出すことが出来ないようであるが、これもアルタイ諸言語との親縁性がないことを裏付けるものではない。この意味するところは日本語が分岐型の言語ではないということであろう。そのことを指示する材料として上記のオーストロネシア諸語との色彩同源語がすべて見出されていることが挙げられる。即ち、アルタイ諸語は日本祖語以前に本来保持していた語を持っていないことを示しているのであり、それはとりも直さず、アルタイ祖語が日本祖語の形成に寄与したのは基礎語彙が中心ではなく文法であったことを暗示している。

1 1. その他 (3 項目)

アルタイ諸語：同源と考えられる語なし

オーストロネシア諸語

意味	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP	PAus
名前	*naCa(<ngā)	*ŋaRan	*Najan	--	*Nag'an

[でない(否定辞)PJ*-ani-/*-az-(<*-ani-su),PK*-ani]

[道 PJ*ti] 同源と考えられる語なし

この項目に関しては語彙としても借用可能でありアルタイ諸語と同源と考えられる語がないので、これらの語は他の語族の語に取って代わられたか、またはその語自体がアルタイ諸言語とは無関係の語族から継承しているものかもしれない。後者に関しては上述の「名前」に対応するオーストロネシア系の言語と同源の語が挙げられるが、その点からしてもアルタイ祖語の日本祖語への貢献の仕方が単なる継承とは異なっていたことが予想される。

まず上記の表から気づくことはアルタイ諸語との同源語が少ない(約 20%)ように思われることである。しかし、これは遠隔比較であるということを念頭に置いた場合、印欧語の場合と比べてあまり遜色はないばかりでなく、どのようにしてこのように多くの語が起源的に共通しているかを単に借用または継承として説明することは不可能であると思う。

これに対してオーストロネシア諸語との同源語が多い(54%)のはどのようにかんがえたら最も自然に説明がつくのか。これは少なく見積もっても基礎語彙の約半分近くがオーストロネシア諸語と同源であることを物語り、特にアルタイ諸語には同源形が見当たらない語彙がそのほとんどを占めている。またいくつかの形態を異にする同義の語が散見されるが、その場合複合形態を取っているもの、即ち、より古い形態をもつものがすべてオーストロネシア諸語と同源であるということである。これは混成言語説の観点から見ると、まさにオーストロネシア祖語が日本祖語の多くの語彙部分を占め、反対に文法部分はアルタ

イ(ツングース)祖語がそのほとんどを占めることが予想されるものである。現に下記のように日本語の語順、統語構造、接尾辞(助詞)などはすべてアルタイ系である。

また上記のリストで気をつけたいのは日本語と朝鮮語だけに同源と思われる対語があり、そのペアには朝鮮語では名詞になっているのに対し日本語では動詞になっているものが多いことがあることである。

例えば、古代日本語の「嗅ぐ」に対応するものはどれも古代・中期朝鮮語(この場合はアルタイ諸語とも共通であるが)の「嗅ぐ」という動詞ではなく、その器官である「鼻」という名詞である。このほかに次のような日朝共通語彙が見られる。さらに上述したようにオーストロネシア諸語と同源であるものもあることが窺える。

J	K	J	K
sak-「咲く」	sak「芽」	um-/umar-「産む/生まれる」	um「芽」
moy-「萌える/生える」	mo「苗」	or-「織る」	or「絲」
ar-「ある/生まれる」	arh「卵」	yip-「言う」	ip「口」
kik-「聞く」	kuy「耳」		

また古代日本語と古代・中期朝鮮語の類似性(宋 99:134—43:1, 2 のみ)について見てみると

- (1) 一時的散発的な言語上の接触ではなく同起源と考えた方が説明の付く面
- (2) 文化的影響(借用)によると考えた方が説明の付く面

の二面性があると考えられるが、(1)に関してはアルタイ的な特徴と見られる面と非アルタイの特徴がある。これを語彙的に見ると、前者は動詞、形容詞の語根や接辞、基礎語彙の中に見出されるのに対して、後者は基礎語彙ではなく、文化語彙の中に見出される。

(1) に関しては：

- (a) アルタイ的要素：動詞，名詞，形容詞の語根や接辞などの形態の一致
- (b) 非アルタイ的要素：古代日本語と古代・中期朝鮮語のみに共通し、アルタイ諸言語には見られない要素：音韻、形態、類型論的共通点(大野 1957; 宋 1999: 90—1)

- 1. 頭に有声音が来ない (OTK の同様)
- 2. l と r の区別がない (areal feature と考えられる)
- 3. 人称語尾を持たない (満州語も同様)
- 4. 敬語接尾辞-si を持つ
- 5. 高低アクセントを持つ
- 6. 母音調和がない (Vovin 1995; Martin 1999)

括弧で示しているようにアルタイ諸言語に全く見られないという特徴でもないものもあるが、概してアルタイ諸言語の特徴から距離を置くものがあることが重要な点である。さら

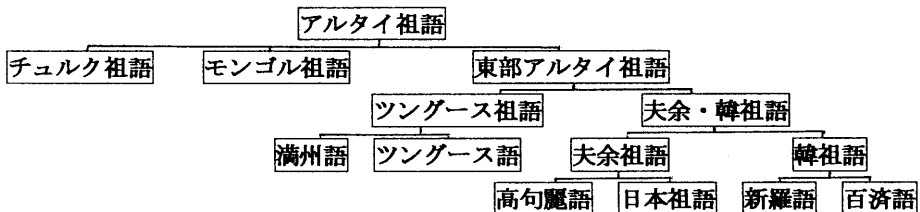
にそれを補強するかのように、(4)、(5)の特徴は全くアルタイ諸言語には見られない特に重要な特徴である。

(6)に関しては、1999年のハワイで行われた国際韓国語学会でS.Martinが朝鮮祖語には母音調和は存在しなかったという衝撃的な発表を行い、その証拠となる材料を数多く提示し、翌年のKorean Linguistics (2000 Vol.10)に掲載された。これが真実の姿であるとする、朝鮮祖語はアルタイ系言語から従来理解されていたよりもかなり離れた位置にあると見た方が妥当であろう。

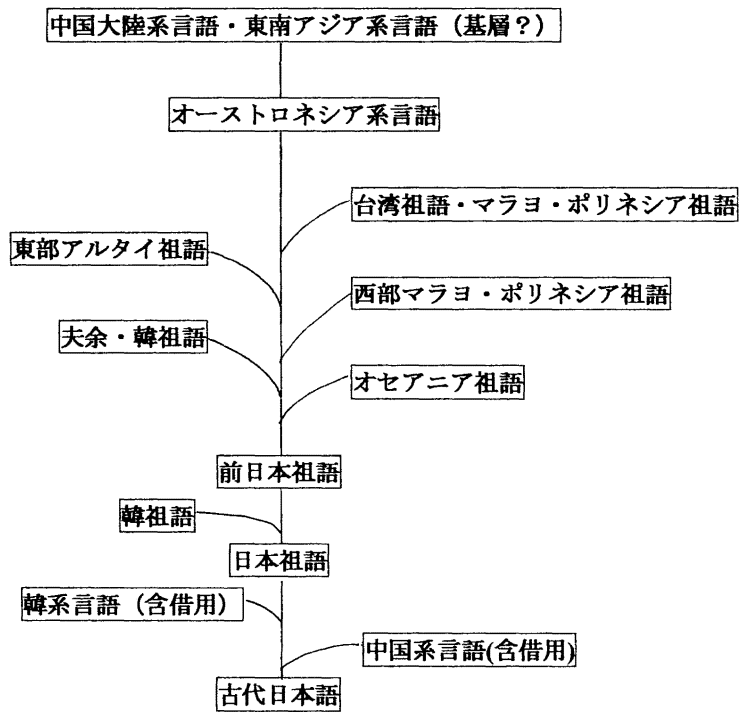
(2)に関しては農作関連語、法関連語、社会構成関連語など社会文化関連語彙が借用されたと考えてはば間違えないであろう。

このような特徴から朝鮮語は起源的にはアルタイ諸言語とは距離があるのに対して、日本語とはさほど疎遠な関係ではないことを暗示している。またこれは日本語と朝鮮語がともにアルタイ諸言語と距離をおく言語であることも暗示している。ここでは示していないが、高句麗語が日本語と朝鮮語とをアルタイ諸言語につなげ、その間のギャップを埋めるという役目を果たし、日本語の系統説をアルタイ諸言語との親縁性を高めるのに有力な根拠になった(宋敏 Song Min 1999: 89)としている。しかしながら、これは日本語と朝鮮語がともにアルタイ諸言語との親縁性のみを裏付け、南方諸言語との関係に関しては不問であり、その親縁関係がないという証拠にはならないし、事実上述したようにオーストロネシア諸語との親縁関係を示すような語例が見出されている。このことは朝鮮語の層に少なくとも南方系の語彙が基層としてかまたは混成言語の一つとして存在している可能性があることを暗示している。

高句麗語に関しては現存する80あまりの語彙のうち4つの数字(3, 5, 7, 10; このうち3, 5, 10はアルタイ系ではないと見られている)を含む30あまりの語が日本語に共通していると考えられ、(河野(1994)は高句麗語ではなくツングース語族の歳語であると主張した。)これが日本語と高句麗語との親縁性の根拠になっている。即ち、日本祖語が韓祖語(=朝鮮祖語)と異なった位相において高句麗語と近い言語であったため、アルタイ諸言語(特にここではツングース語族)、朝鮮語と異なった特徴をもつに至ったと考えられる。アルタイ諸語のみとの系統関係を図式化すれば以下になる。



また上記のアルタイ諸語間の共通語彙は基礎語彙であることにも注意されたい。これらの語の共通性はアルタイ諸語間（三語族間）の親縁性を最も強力に裏打ちしていると考える。これは**多量の基礎語彙の借用は不可能**であるから、日本語、朝鮮語も含めてアルタイ諸語と共通する語が存在する場合これらの言語の同源性が高いことを示している。それとともに縄文初期の時代も含めた言語系統樹はオーストロネシア系の言語との同系関係を含め、日本祖語の同系関係は以下のようになると考えられる。



日本列島への到来順序は具体的なことは現時点ではわからないが、少なくとも言語のみの混成言語説における理論によれば、オーストロネシア系言語が先来であり、アルタイ系言語が後来であるが、実際には主になる言語の到来順序はそうであったにせよ、複数の言語の波があったと考えて間違えないと思う。従って、語によってはオーストロネシア系でも後に借用されたものもある蓋然性があるが、基本路線は上述の順序と考えてよいと思う。

b. 規則的な音韻対応を示すこと
アルタイ諸語との子音対応

上記 a の復元形を基に音韻対応関係を整理すると次のようになる。

PA	PJ	PK	PMT	PM	PT
*p	*p	*p	*p	*p	*p
*b	*b	*b	*b	*b	*b
*t	*t/*d	*t	*t	*t	*t
*d	*y/*d	*d	*d	*d	(*y)
*k	*k	*k	*x/*k	*k	*k
(*g	*g	*g	*g	*g	*g)
(*č	*t	*č	*č	*č	*č)
*j	*j	(*j)	*j	*j	*j
*s	*s	*s	*s	*s	*s
*m	*m	*m	*m	*m	*m
*n	*n	*n	*n	*n	*n
*n	*g	*g	*n	*n	*n
*-r ₁	*r	*r	*r	*r	*r
(*-r ₂	*Z/*r	*r/*-y-	*r	*r	*z)
*l ₁	*r	*l	*l	*l	*l
*-l ₂	*-s-	*-l-	*-l-	*-l-	*-s-

()内は他の比較語彙によって埋めた。

音韻対応の詳細を記述するのは紙面の関係上不可能であるが、アルタイ諸語間の音韻対応に関する先行研究をも参考にして復元した。しかしながら、先行研究の中には日本語または朝鮮語の復元形を反映させてアルタイ祖語を復元しているものがある (e. g. Starostin, Vovin) が、ここでは日本語と朝鮮語は厳密には最初からアルタイ諸語の中に含めることはできないので、この二言語を除いて三語族間で復元できるものをアルタイ祖語とした。

上記の表から分かるように、ほぼ規則的な音韻対応があることが理解される。この中で従来問題にされてきたように、アルタイ祖語の音素 /r, r, l, l/ に対応する日本語の音素はチュルク語族の対応音素と非常に類似しているということが言える。特にアルタイ祖語の音素 /r, l/ に対応する日本語の音素の一つに /z. s/ があり、この対応が認められると、日本語をアルタイ諸言語の一派と考えてもよいかもしれない。それはこの対応がほとんど借用の余地のない基礎語彙に見出せるからである。また母音の大まかな音韻対応が見られるが、多くの場合まだ問題が多くその説明が急がれる。

オーストロネシア諸語との子音対応

上記 a の復元形を基に音韻対応関係を整理すると次のようになる。

Paus	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP
*p	*p	*p/*x	*p	*p
*b	*p/*m	*p	*b	*b/*p
*t	*t/*ʔ	*t	*t/*l	*t/*n
*d	*s	*l	*d	*d
*s	*s/*t/*ts	*s/*ts	*s/*D	*s
*z	*t	*	*d/*D	*
*k/*R	*k	*k	*k/*R	*k
*g	*k/*C	*g/*R	*g/*d/*R/*j	*R
*h	*C/*ʔ	*	*h	*h
*m	*m	*m	*m	*m
*n	*n	*n	*n	*n
*n	*n/*ʔ	*n	*n	*n /*R
*l/*t	*r	*l	*d/*N	*l
*w	*w	*	*w	*w
*ʔ	*y	*	*R	*R

オーストロネシア諸語間の音韻対応の規則はほぼ確立しているので、それはここでは問題にしないが、下位の語族間での対応も示した。従ってここで問題となるのは日本祖語とオーストロネシア諸語・祖語との音韻対応の関係のみである。上記のようにほぼ大きな問題もなくそれぞれの音素が対応していると見てよい（基礎語彙のみから再構築できなかった音素もあるが、それはそのまま書かずに*のみを挙げ示した）と考える。

c. 文法項目と形態素に一致が見られること

(1) 格助詞

多くの日本語の格助詞がアルタイ諸語の接尾辞に対応することは先行研究によって知られている事実である。少なくとも他の語族と比較したものはウラル語族とタミール語のみであるが、それはあまり成功したとはいいがたい。またオーストロネシア諸語には助詞は存在しないので、格助詞自体がオーストロネシア系諸語の継承物ではない。以下にアルタイ諸語との対応表を挙げる。

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
主格	*-i	*-i	--	--	--	--
所有格	*-n-ka(>OJ-ga-)	--	*-n-ki(> η i)	--	*-n-kV(>OT- η)	*-n-kV
対格	*-bo(強調も)	*-bi(>OK* - γ il)	*-ba(強調)	*-ba	*-ma(強調)	--

向格 1	*-ti(>OJ -či)	--	*-ti(>*-čī)	--	--	--
向格 2	*-ra	*-ru(>OK -ro)	*-ri	*-ru	*-ra/*-ru	*-ru
沿格	*-ri「向格」	*-ri「向格」	*-li	*-li	--	*-li
所有/処格	*-tu/*-du(>OJ -yu)	--	*-du「与/処格」	*-du「処格」	*-du「処格」	*-du「処格」

上記の最初の項目である主格*-i はオーストロネシア祖語の限定詞との関連も非常に強く示唆しているように見える。それはアルタイ諸語にはどれも主格助詞は存在しないということとオーストロネシア諸語の限定性を示す機能が考えられるからである。

日本語との比較で共通している格助詞の項目が最も多いのはツングース祖語であるが、この点は形態・統語のレベルにおいて日本語とツングース諸語との親縁性が深いと考えられるのに対して、地理的に近い朝鮮語との親縁性がやや浅く、日本語に対してツングース諸語と朝鮮語のそれぞれの同系関係が幾分異なっていることが窺われる。これは上記の基礎語彙の項で述べた何対かの日本語動詞と朝鮮語名詞の例と類似しているが、同源と考えられる語彙項目がツングース祖語と朝鮮祖語とで違っていることも特徴的である。

(2) 動詞及び形容詞に付く接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
否定辞 1	*-ani/*-az-(<*-ani-su)	*-ani	--	--	--	--
否定辞 2	*-ma(>OJ maǰi)	*-ma-(MK -mal-)	--	--	*-ma	--
述部導入接辞	*-bi(>*-wi>OJ -i)	--	*-bi	--	--	--
尊敬接辞	*-si	*-si/*-sy	--	--	--	--
仮定接辞	*-masi	--	*-mačV	--	--	--
接続接辞	*-ku(形容詞+)	*-ko	--	--	--	--

否定辞は借用可能であるという事実があるが、日本祖語と韓祖語の親縁性の近さから借用された可能性は非常に低いのではないかと考える。それは日本祖語には 2 種類の否定辞が見られるが、否定辞 1 では意味が幾分変容し機能が異なっている。また否定辞 2 では MK -mal-はウィットマンの法則に従って日本語では ma という予想される形態となっているからである。

述部導入接辞は本来連用形-i<*-wi<*-bi であり、終止形もかねていたと考えられ、連体形の -u が後に終止形に拡大し、本来の終止用法-i は縮小し連用用法のみを担うようになったと考えられる。この裏づけとして ari, wori などのラ変動詞の終止形 -i で終止しており、これは本来の名残と考えられるためである。しかし、この接辞に関してはオーストロネシア諸語との関係もあるので、その点は後に述べる。

これらの接尾辞はほとんどが朝鮮語かツングース諸語との共通語彙であるが、このことはとりもなおさず、朝鮮語とツングース諸語がほかのアルタイ諸語と比較して日本語に非常に近い親縁関係にあることを示唆している。また尊敬接辞が日本語と朝鮮語のみに共通しているという事実は借用はほとんど意味・機能から考えて不可能であろうから、この2言語が同系である蓋然性が高いことを示唆していると同時に、その分岐は多分相当時代が下がってからである可能性が高いと思われる。従って、ツングース祖語からの分岐は朝鮮祖語よりも古いと考えられる。

(3) 動名詞化接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
非完了	*-ra「未然」/*-ri「連用」	*-r	*-ra/*-ri	*-r	*-r	*-r
非完了	*-si「状態 V;形容詞語尾」	--	*-si	--	--	--
非完了	*-m(>OJ -mu)「推量」	*-m	*-m	*-m	*-m	*-m
完了	*-n(>OJ -nu)	*-n	*-n	*-n	*-n	*-n
完了	*-ki *-ke/*-ka(>MK -ke/-ka/-Ge/-Ga)		*-kV	*-γ a(>WM- γ an)	--	*-ke

これらはすべて時制と相に関する接辞であるが、その大部分が朝鮮語を含むすべてのアルタイ諸語と共通しているという特徴が見出せる。この点から考えても、日本語が疎遠な関係であっても、同系である蓋然性が非常に高いといえるのではないかと考える。

(4) 名詞に付く接尾辞

	PJ	PK	PMT	PM	PT	PA
複数接辞	*-ta-ti *-tə-l(>MK -tolh)	*-ta/*-ti(集合)/*-l(複数)	--	--	--	--

日本語とツングース諸語とだけが一致するものも多いが、これは下記の形態素の部分からも理解できると思うが、日本語と朝鮮語だけが非常に近い関係をもっていたのではなくツングース諸語とも非常に深い関係をもっていたことが理解される。

(5) ウイトマンの規則 (PJ における *-r-, *-m- 消失規則)

これは1985年のジョン・ウイトマンの学位論文で示した日本語と韓国語の音韻変化規則であるが、この規則については大野(1957)「日本語の起源」でもその一部の音韻対応例が示されてはいたものの、体系的に示されていなかった。それをより緻密に体系的に示したのがこの法則である。この法則はすべてアルタイ諸語にまで敷衍できるとは限らないが、多くのアルタイ諸語と同源であると思われる語には適用できるものと考えられる。また上で見

たように、朝鮮語には非アルタイ的な語がいくつか見られるため、それらについてもこの法則が適用できる可能性もあるが、現時点ではその可能性は不明である。

MK において -l-, -m- の前の音節が高く（上声：）長い場合にはそれに対応する OJ の語における語中の -l-, -m- は -r-, -m- として保持される。反対に MK において -l-, -m- の前の音節が低く（去声・）短い場合にはそれに対応する OJ の語における語中の -l-, -m- は消失し保持されない。

PKJ > PJ > OJ

PKJ > PK > MK

*-r- > Φ（ゼロ） > Φ（ゼロ） / CV _ (V/C)

*-m- > Φ（ゼロ） > Φ（ゼロ） / CV _ (V/C)

*-r- > *-r- > -l- / CV _ (V/C)

*-m- > *-m- > -m- / CV _ (V/C)

MK .mol 「藻」 : OJ mo 「藻」

MK .kuma 「子」 : OJ ko 「子供」

MK :kol 「谷」 : OJ kura 「鞍」

MK :om 「かさぶた、かゆみ」 : OJ umi 「膿」

上記 4 例のうち上段は古代日本語において語中の -r-, -m- が消失した例であり、下段はそれが保持された例である。これらの例のほかに音節の縮小が生じたものがあり、以下にその例をあげる。

MK :oy(<*o-ri) 「瓜」 : OJ uri 「瓜」

MK :kom(<*ko-ma) 「熊」 : OJ kuma 「熊」

上記の MK 「瓜」「熊」の例はそれぞれ MK の -r- と -m- の前の音節が高い（上声：）の場合で、二次的に発達したものである。それは本来語頭の音節が低い二音節語であったものが一音節化し（「平声」（第一音節）+「去声」（第二音節）>「上声」となった）、後の MK では -r-, -m- を失ってしまった例である。これに対し、OJ では本来の第二音節の -r- と -m- が保持されたものである。

この規則は日本語と朝鮮語の親縁関係をより確実なものにしたという点とこれまで不明であった同源語がさらに抽出できる可能性を見出した点で非常に重要である。

(6) 接頭辞と接尾辞

従来古代日本語の接頭辞がオーストロネシア系言語との同源性において指摘されてきた。これはアルタイ系言語には接頭辞が全く存在しないため、アルタイ諸語との関連では接頭辞は全く説明が不可能であることによる。またオーストロネシア諸語には多くの接頭辞（接中辞も見られるとともに接尾辞も多い）が存在するので、オーストロネシア諸語との連関が注目されるようになった。以下に日本祖語の接頭辞と同源と見られるオーストロネシア祖語とその下位祖語を対比する。

意味	PAus	PJ	PFor	PWMP(>PInd:PPil)	PCEMP
性質・状態	*ma(N)-	*ma-	*ma-	*ma(N)-	*ma-
偶発性・無意図性	*ta-	*ta-	*ta-	--	*ta-
被害性、受動	*ka-	*ka-	*ka-	*ka-	*ka ⁺

類似概念の派生	*sa-	*sa-	*sa-	*sa-	*sa-
特定性・単数性（多機能）	*i-	*i-	*i-	*i- ⁺⁺	*i-
限定詞・述部導入詞	*-i	*-i	*-i	*-i [#]	*-i
++:PPol(ポリネシア系諸語)を除く ++:Pind(マレー・インドネシア系諸語)を除く					
# :フィリピン系諸語を除く					

これらの接頭辞のうち *ma-*を除き、すべてが古代日本語の時期には化石し、形態素の一部になっており、中には形態素の再構成が起こり一形態素として機能し、接頭辞としては全く認識されなくなったものもある。

接頭辞が残存している理由として考えられることはアルタイ諸語では接頭辞は全く持たないので、前日本祖語の時期に複数のアルタイ系言語との接触後もそのまま接頭辞としてあまり干渉を受けなかったことによる。実際にはその接頭辞としての認識も薄れるとともに、語によっては一つの形態素の一部として再分析され、古代日本語の時期にはすでにほぼ化石化した状態になったものと考えられる。

2. おわりに

基本的な比較言語学上の原則に則り朝鮮語を含むアルタイ諸言語とオーストロネシア諸語を日本語と比較し、その親縁性を述べた。上記のように日本語は朝鮮語を含むアルタイ諸言語とオーストロネシア諸語と十分親縁関係があるという確実な証拠が徐々にではあるが、見出されている。特にウィットマンの法則が発見されたことにより、日本語と朝鮮語との親縁関係は従来の同源語の語数を上回ってきており、さらに同源語が朝鮮語にのみならずアルタイ諸語にも見出されている。近い将来、朝鮮語、アルタイ諸語、オーストロネシア諸語との親縁関係がより確実になる日が訪れるであろう。

注：ここで提示した祖語形の復元手続きに関しては紙面の関係上示すことができないが、アルタイ祖語形は Benzing(1955), Poppe(1960), Street(1974), Street & Miller(1975), Tsintsius(1975-7), Miller(1981), 金 東 昭 (1981), Whitman(1985), Starostin(1991), Martin(1990,1994), Vovin(1997), 宋敏 (1999) を参考にして復元した。 またオーストロネシア祖語形やその他の下位の祖語形は Dempwolff(1931,38), Capell(1943), Dyen(1953a,b), Milke(1961,68), Blust(1969,70,71,72,73), Biggs(1965), Grace(1969,71), Pawley(1969a), Dahl(1973), Brandstetter(1911,15), Li(1972), Zorc and Charles(1971), Healey(1974)、Comparative Austronesian Dictionary:Part1-4(1994,95)の祖語形を使用した。

主 要 参 考 文 献

1. Benzing, Johannes 1955 Die tungusischen Sprach versuch einer vergleichenden Grammatik, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag
2. Biggs, Bruce, 1965 'Direct and indirect inheritance in Rotuman', Indo-Pacific Linguistic Studies I. G.B. Milner and Eugenie J.A. Henderson (eds.) Amsterdam: North-Holland pp.383-415, also in Lingua 14:383-415
3. Blust, Robert A., 1969 'Some New Proto-Austronesian Trisyllables', Working Papers in Linguistics 1/10 pp.27-62 Honolulu: University of Hawaii
4. Blust, Robert A., 1970 'Proto-Austronesian Addenda', Oceanic Linguistics 9/2.pp.104-162
5. Blust, Robert A., 1971 'Proto-Austronesian Addenda', Working Papers in Linguistics 3/1. pp.1-106 Honolulu: University of Hawaii
6. Blust, Robert A., 1972a 'Proto-Austronesian Addenda with Cognates in non-Oceanic Austronesian Languages: a preliminary list', Working Papers in Linguistics 4/1. pp.1-43 Honolulu: University of Hawaii
7. Blust, Robert A., 1972b 'Additions to Proto-Austronesian Addenda and Proto-Oceanic Addenda with Cognates in non-Oceanic Austronesian Languages', Working Papers in Linguistics 4/8. pp.1-43 Honolulu: University of Hawaii
8. Blust, Robert A., 1973 'Additions to Proto-Austronesian Addenda and Proto-Oceanic Addenda with Cognates in non-Oceanic Austronesian Languages, No.II', Working Papers in Linguistics 5/3. pp.33-61 Honolulu: University of Hawaii
9. Brandstetter, R. 1911 Gemeinindonesisch und Urindonesisch. Renward Brandstetter's Monographien zur Indonesischen Sprachforschung 8, Lucerne
10. Brandstetter, R. 1915 Die Lauterscheinungen in dem Indonesischen Sprachen Renward Brandstetter's Monographien zur Indonesischen Sprachforschung 12, Lucerne
11. Capell, A., 1943 The Linguistic position of South-eastern Papua, pp.109-15. Sydney: Australasian Medical Publishing Company Limited
12. Dahl, Otto Christian, 1973 Proto-Austronesian, Lund Sweden
13. Dempwolff, Otto 1931 'Einige Probleme der vergleichenden Erforschung der Sudsee-Sprachen', Anthropos 26:pp.157-70
14. Dempwolff, Otto 1938 Vergleichende Lautlehre des Austronesischen wortschatzes III. Zeitschrift fur Eingeborenen-Sprachen, Beiheft 19. Berlin.
15. Dyen, I. 1953a The Proto-Malayo-Polynesian Laryngeals, William Dweight Whitney Linguistic Series. Baltimore:Linguistic Society of America.
16. Dyen, I. 1953b 'Proto-Malayo-Polynesian *Z', Language 27:pp.534-40

17. Healey, Alan 1974 Proto-Philippine reconstructions in Thomas N. Headland and Alan Healey, 'Grammatical Sketch of Casiguran dumagat'. Papers in Philippine Linguistics No.6, Pacific Linguistics SeriesA, No.43, pp.1-48
18. Itabashi, Yoshizo 1987 'Altaic Evidence for the Japanese and Korean Case Suffix Systems' Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Washington
19. Itabashi, Yoshizo 2000a 'Kodai Nihongo to Osutoronesia shogengo ni okeru Ichikeitai no Dogensei(the Morphological Cognateship of Old Japanese and Austronesian)-No.2 Old Japanese', Gengo Bunka Ronkyu(Journal of Languages and Cultures) No.11, pp.165-190, University of Kyushu
20. Itabashi, Yoshizo 2000b 'Kodai Nihongo to Osutoronesia shogengo ni okeru Ichikeitai no Dogensei(the Morphological Cognateship of Old Japanese and Austronesian)-No.3 Austronesian', Gengo Kagaku(Linguistic Science) No.35, pp.47-64, University of Kyushu
21. Itabashi, Yoshizo 2001 'Kodai Nihongo to Osutoronesia shogengo ni okeru Ichikeitai no Dogensei(the Morphological Cognateship of Old Japanese and Austronesian)-No.1 Old Japanese', Hikaku Shakai Bunka(Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies) Vol.7 pp.57-68, University of Kyushu
22. Grace, G.W., 1969 'A Proto-Oceanic finder list', Working Papers in Linguistics 1/2. pp.39-84 Honolulu: University of Hawaii
23. Grace, G.W., 1970 'Proto-Austronesian monor morphemes', University of Hawaii, Dept. of Linguistics mimeographed
24. 橋本萬太郎 1978 「比較方法の問題と限界」月刊言語 vol.7, No.11
25. 金東昭(Kim, Dongso) 1981「韓国語 Tungus 語 音韻比較研究」暁星女子大学校出版部
26. Li, Paul J.K. 1972 'On comparative Tsou', Working Papers in Linguistics 4/8 pp. 19-46, Honolulu: University of Hawaii
27. Martin, Samuel 1990 'Morphological clues to the relationships of Japanese and Korean' in Philip Baldi (ed.) Linguistic Change and Reconstruction Methodology, pp.483-509, Berlin and New York: Mouton de Gruyter
28. Martin, Samuel 1994 'Recent Research on the Relationships of Japanese and Korean', in S. Lamb & E. Mitchell (eds.) Sprung from Some Common Source, Stanford Univ. Press
29. Milke, Wilhelm 1961 'Beitrage zur ozeanischen Linguistik', Zeitschrift fur Ethnologie 86:/2 pp.162-82
30. Milke, Wilhelm 1968 'Proto-Oceanic Addenda', Oceanic Linguistics 7/2 pp.147-71
31. Miller, Roy 1981「日本語とアルタイ諸語」大修館書店
32. Miller, Roy & John Street 1975 Altaic Elements in Old Japanese: Part I(draft version), Madison:

privately published

33. Murayama, Shichiro 1957 'Vergleichende Betrachtung der Kasus-Suffixe im Altjapanischen' in *Studia Altaica*, Festschrift für Nicholas Poppe zum 60. Geburtstag am 8. pp.126-131, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
34. Pawley, Andrew 1969a 'On the Internal Relationships of Eastern Oceanic Languages', *Studies in Oceanic Culture History*, vol.3, R.C. Green & M. Kelly(eds.) pp.1-142, Pacific Anthropological Records, No.13, Honolulu: Bernice Pauahi Bishop Museum
35. Ramsey, Robert 1991 'Proto-Korean and the Origin of the Korean Accent', in W. Boltz and M. Shapiro (eds) *Studies in the historical phonology of Asian languages*, pp.213-238, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins
36. 宋敏(Song, Min) 1999 「韓国語と日本語のあいだ」 東京：草風社
37. Starostin, Sergei 1991 *Altaiskaia problema I proisxozhdenie iaponskogo iazyka*, Moscow: Nauka
38. Street, John 1974 *On the Lexicon of Proto-Altaic: A Partial Index to Reconstructions*, Madison:privately published
39. Tsintsius, Vera ed. 1975-77 *Sravnitel'nyi slovar' tunguso-ma'chzhurskikh iazikov*. Vol. 1-2, Leningrad: Nauka
40. Tryon, Darrell T.(ed) 1994-5 *Comparative Austronesian Dictionary*, Mouton De Gruyter
41. Vovin, Alexander 1997 'Notes on Some Japanese-Korean Phonetic Correspondences', *Japanese/Korean Linguistics* Vol.3 pp.338-350
42. Whitman, John 1985 *The Phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*, Unpublished Ph.D. Dissertation, Harvard University
43. Wurm, S.A. & B. Wilson 1975 *English Finderlist of reconstructions in Austronesian Languages* (Post-Brandstetter), Dept. of Linguistics, Australian National University
44. Zorc, R. David and Matthew Charles 1971 *Proto-Philippine Finder List*, Ithaca: Cornell University typescript/xerox